

ニフレル・うまれる

小畑 洋

プロフィール
1967年京都府生まれ。生きてい
るミュージアム「NIFREL(ニフ
レル)」館長。海遊館開業当初より飼
育担当として勤務し、国内では類を
見ないジンベエザメの陸上長距離輸
送や、希少なイトマキエイの飼育展
示にも世界で初めて成功する。海遊
館最大のリニューアル「新体感エリア」
及び「ニフレル」建設の中心人物となっ
て構想・監修をおこなう。

昨年二月九日、万博記念公園のエキスポシティ内に「生きているミュージアム「ニフレル」」が誕生した。ニフレルは、海遊館が初めてプロデュースした施設で、水族館・動物園・美術館の要素を持つ、新ジャンルのミュージアムである。コンセプトは「感性にふれる」。子供の頃には誰しもが持っていた、小さな生き物や自然の現象に目を見はり、心惹かれる感性。そんな感性を刺激し、ニフレルでの体験がきっかけとなって、来館者の日々の生活においても、新たな気付きが生まれて欲しいという思いを込めた。

展示全体のテーマは「多様性(多様ないのちと個性の繋がり)」で、様々な生き物の個性にフォーカスをあて、その魅力を分かりやすく表現することで、生き物と来館者を繋げられないかと考えた。そして、最もこだわったのが、彼らを忠実に美しく魅せる事。水族館や生き物に興味の無い人にも、彼らの魅力が直感的に伝わる展示を目指した。

そんなニフレルも、早いもので開業して二年が経とうとしている。来館者の反応は様々だが、エントランスから入り、最初の「いろにふれる」ゾーンでは、空間全体と水槽内の小さな生き物に対し、しばしば感嘆の声が上がる。大水槽では埋没してしまいう小さな生き物に気付き、驚きを感じてもらっている事を心から嬉しく思う。また、「うごきにふれる」

ゾーンでは、足もとや頭上を跳び回るワオキツネザルや、大きな風を起こし目の前を飛ぶモイロペリカンに歓声が上がります。来館者と動物が同じ空間を共有する事で、今までもよりダイレクトに彼らの魅力が伝わっていると感ずる。そして、このゾーンは「多様な行動」をテーマにしているため、自然界では出会う事無い、哺乳類や鳥類が複数種同居している。当初は、彼らがどのように影響し合うか心配したが、お互いの距離を縮めたり伸ばしたりしながら、それぞれがバランスよく生活し、退屈になりがちな飼育環境下で、適度な刺激を与え合っている。また、来館者については、危害を加えない動きの遅い動物として認識されているようで、彼らはあまり気にとめていないようだ。このゾーンは、来館者(ヒト)も動物の一種として加わり、日々、変化を続けている点で今後が楽しみな展示だ。

新施設を創るのは初めての経験だったが、色んな感性や知識・経験を持つ人が同じ方向を目指して混ざり合うと、結果として新たなものが生まれると改めて実感した。人それぞれ見え方が違う、だから出来る事も違う、そして、人も含め全ての生き物は、個性的だからこそ魅力がある。これからも、色々な個性と繋がり合いながら「生きているミュージアム「ニフレル」」は成長していく。

月刊
みんな

10月号日次

- | | |
|---|--|
| <p>1 エッセイ 千字文
ニフレル・うまれる
小畑 洋</p> <p>特集 造る人と博物館</p> <p>2 未来のデザイナーを育てる博物館
野林 厚志</p> <p>4 芸術家がとらえた微小生物
——博物館と美術大学のコラボレーション
楠岡 泰</p> <p>5 みんなの路地裏探訪——映像音響資料収蔵庫編
下道 基行</p> <p>7 最後は布のミュージアム
岩立 広子</p> <p>9 想像のためのスコア——パタヴィア、1658
mamoru</p> <p>10 ○○してみました世界のフィールド
シンセキのおバサンのような立ち位置
森 明子</p> | <p>12 みんなく Information</p> <p>14 味の根っこ
マーマイト
河西 瑛里子</p> <p>16 文化遺産おもてうら
開く? 閉ざす?——ふたつのヴァラームにみる
宗教文化財とツーリズム
高橋 沙奈美</p> <p>18 手芸考
糸と女——紡がれる物語
平芳 裕子</p> <p>20 ながなんちゃ
ネンっていったい何でんネン
庄司 博史</p> <p>21 次号予告・編集後記</p> |
|---|--|